

母子生活支援施設における母子分離・母子再統合のプロセス

—施設職員へのインタビュー調査からの考察—

○ 大阪府立大学 伊藤嘉余子 (03930)

野口啓示 (福山市立大学・02736), 千賀則史 (名古屋大学・09143) 福田公教 (関西大学・04184)

石田賀奈子 (立命館大学・06061), 久保樹里 (大阪歯科大学・06241), 原田旬哉 (園田学園女子大学・07960)

キーワード: 母子生活支援施設, 措置変更, 家族再統合

1. 研究目的

社会的養護において、児童相談所の判断により子どもが生活する場所を変更することを「措置変更」という。措置変更が検討、実施される背景として、子どもの年齢、子どもの「施設不適応」と判断されるような行動上の困難さ、家庭復帰が困難な保護者の状況等が挙げられる。いずれの理由による措置変更であっても、「子どもにとって、よりよく適応しやすい養育環境への移動」を目指すものである。しかし、措置変更は子どもにとって、大切な愛着対象との分離体験や見捨てられ体験につながるリスクが高いため、子どもが抱く失望感等に十分に配慮したプロセスとなるよう努める必要がある。

社会的養護における措置変更は、子どもにとって極めて重要なフェーズだといえるが、措置変更に関する先行研究はあまり多くない。また、社会的養護施設の一つとして位置づけられている母子生活支援施設に関する調査研究も児童養護施設等に比べると少ない。

母子生活支援施設における措置変更（母子分離・母子再統合）のプロセスは、親子分離や家庭復帰のプロセスと似ており、施設間措置変更とは異なる配慮や実践が必要になる。施設間措置変更では児童相談所のワーカーが果たす役割が大きい。しかし、施設入所の窓口が児童相談所ではない母子生活支援施設における措置変更の場合、児童相談所との連携や母子生活支援施設・児童養護施設間の措置変更時の施設・機関間連携には、施設間措置変更時とは異なる特徴や課題があるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、母子生活支援施設から母子分離のための措置変更を行い、その後、母子再統合したケースのプロセスの実態とそこで必要となる配慮、今後の課題について明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

1) 調査対象：2つの母子生活支援施設の協力を得て、2014年度に母子生活支援施設から母子分離し、その後、母子再統合した4事例を収集し、これらを分析対象とした。

2) 調査方法と内容：あらかじめ郵送したインタビューガイドに基づき、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。インタビューには、各施設において、当該ケースについて十分把握している職員に対応して頂いた。インタビュー実施時期は2015年11月から12月、及び2017年4月である。インタビュー所要時間は、1事例あたり平均約70分であり、1事例につき、2～3回インタビューを実施している。

3) 分析方法：インタビューの録音データを文字起こしたテキストデータを佐藤郁哉（2008）による質的データ分析方法に基づき、「事例-コード・マトリックス」を用いて分析を行った。具体的には、①データ切片化、②オープン・コーディング、③焦点的コーディング、④事例-コード・マトリックスを用いた事例中心の分析、⑤事例-コード・マトリックスを用いたコード中心の分析、⑥第一段階の再文脈化（データベース化）⑦第二段階の再文脈化（ストーリー化）、の手順で分析を行った。焦点的コーディングで得られたコードを基に、事例-コード・マトリックスを作成し、第一段階としての再文脈化を行い、サブカテゴリーとカテゴリーを抽出した。さらに、第二段階の再文脈化では、カテゴリー間の関係性を探索しながら、措置変更プロセスの図式化を行い、ストーリーラインを作成した。

3. 倫理的配慮

インタビューの際、調査協力者および施設長の承諾を得てICレコーダーを用いてインタビュー内容を録音した。インタビューは、施設内の面接室等で行い、インタビュー対象者以外の人間に話が漏れることのないよう配慮した。インタビューに先立ち、本インタビュー調査の趣旨、内容、方法、録音の是非、結果の公表方法、データの破棄等について文書および口頭にて説明を行った上で、インタビューに協力頂くかどうか判断を仰ぎ、同意書に署名を頂いた。なお、本調査については、大阪府立大学大学院人間社会学研究科の倫理審査委員会の承認を得ている。

#### 4. 研究結果

分析の結果、テキストデータから120のコードを抽出した。それらのコードを30のサブカテゴリーにまとめ、それらを11のカテゴリーにまとめることができた。さらにそこから4つのカテゴリーグループを生成した。次に、得られたカテゴリーについて、相互の関連性を探索しながらプロセスの図式化をしたがその図は当日配布資料で示す。

(表)カテゴリーグループおよびカテゴリー一覧

CG	カテゴリー	サブカテゴリー
母子分離の準備	母子分離の理由	(1) 母からの訴え, (2) 本児への虐待
	母親の現状認識支援	(3) 母子分離への葛藤への寄り添い, (4) 分離理由の正しい理解の促進, (5) 分離後の再統合への動機づけ
	子どものケアと支援	(6) 分離への不安の軽減, (7) 分離への不満への寄り添い, (8) 分離後の生活への動機づけ
	変更先施設への引継ぎ	(9) 母子の生活歴の情報提供, (10) トラブル時の対応事例の提供, (11) 施設・児相間の見立ての違いの摺合せ, (12) 日頃のやりとりの少なさからくる葛藤
再統合に向けての支援	母親の養育体制の立て直し	(13) 母親への家事支援, (14) 母親の精神的サポート, (15) 子どもとのコミュニケーションへの助言支援
	子どもへのケア	(16) 母親に対する不信感や不安感への寄り添いとケア, (17) 母親の現状認識支援, (18) 母親以外の「頼れる大人」の確保
	母子関係再構築支援	(19) 母子の面会や交流機会の提供, (20) 母子交流時の仲介・立ち会い, (21) 母による子ども理解の支援と促進
再統合の理由	母子にとってのタイミング	(22) 子どもの年齢, (23) 子どもの進学, (24) 子どもの治療終結
	養育環境の改善	(25) 虐待者との離別/分離, (26) 母の強い引き取り要求
課題	関係機関等との連携の困難さ	(27) 遠方への措置変更ケース, (28) 日頃からのネットワーク不足
	母親支援と子ども支援の葛藤	(29) 「女性である母親」との対峙, (30) 改善・向上困難な母親への支援

#### 5. 考察

本調査結果から、以下の内容について検証する必要性が示唆された。

- 措置変更に対する母子間の認識や思いのギャップへの支援の重要性と困難さ
  - ▽子どもの「被害者である自分がなぜ望まない生活を強いられるのか」という不満へのケア
  - ▽母子それぞれの現状認識支援と、母子交流時の衝突への対応
  - ▽母子再統合に向けての母子の動機づけ形成とエンパワメント
  - ▽母子生活支援施設職員が果たす役割の確認と施設内連携
- 母子分離後の母親への支援の困難さ
  - ▽母親の養育体制の整備・向上と現実
  - ▽クライアント理解における「母であること」と「女性であること」への視点の両立
- 母子生活支援施設の特性と連携の困難さ
  - ▽日頃からのネットワーク・交流の少なさ
  - ▽児童相談所との連携の難しさの克服の必要性
  - ▽情報共有の不均衡の改善の必要性

謝 辞

本調査研究は、平成27年度厚生労働省：子ども・子育て支援推進調査研究事業「措置変更ケースにおける支援内容や配慮事項に関する調査研究事業」（主任研究者：伊藤嘉余子）の一部として実施したものである。本調査研究にご協力頂いた関係諸氏に深謝いたします。